

越前焼甕・壺・鉢（擂鉢）の生産・流通・消費

岩田 隆（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）



1．越前焼の系譜と消長

越前焼は12世紀末ごろ東海地方からの瓷器系の技術を導入して成立する。当初は須恵器を生産していた天王川の東部の丘陵に越前焼の窯が営まれたが、鎌倉前期にはより耐火度の高い粘土を求めて天王川西部の丘陵の谷に越前焼の窯が築かれ始め、鎌倉中期には西部丘陵全面に展開するようになった。室町時代になると窯数が減少し始め、戦国時代後半から窯が大型化するとともに窯数をさらに減少させ、平等の谷周辺に収束する傾向が強まる。越前古窯址の範囲と分布については、丹生郡旧織田町、宮崎村の天王川を挟んだ丘陵に東西3km、南北6kmの広い範囲に約200基が確認されている。

2．流通状況

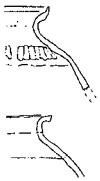
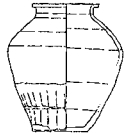
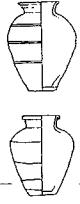



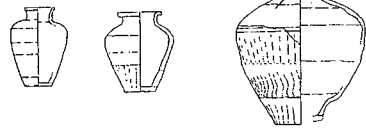

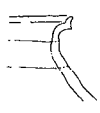
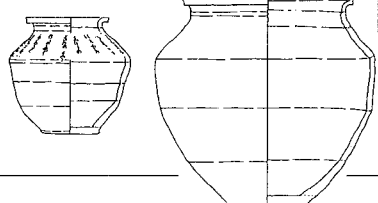

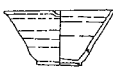

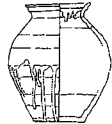
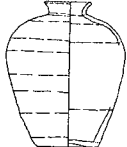
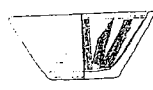
越前国内における12世紀後半の越前焼の商圈は、敦賀市深山寺経塚群に越前焼がみられないように南は木ノ芽峠を超えることは出来ず、北へのそれはおそらく越前国内にとどまるであろう。逆に江波経塚群のように越前焼生産地近くまで、常滑焼や珠洲焼が流入してきている。13世に入っても前半まではこの状況が大きく変わることはなかった。越前焼の生産地から20kmと離れていない鯖江南屋敷中世墳墓群でも加賀焼が出土している。しかし、後半にはいると加賀南部の三木だいもん遺跡では越前焼の鉢が出土しており、すこしずつ生産も上がっていったらしくその販路を拡大していった。14世紀になると平泉寺など九頭竜川以北でもそのほとんどが越前焼で、加賀焼・珠洲焼が僅かに残るだけとなり、15世紀には全て越前焼となる。


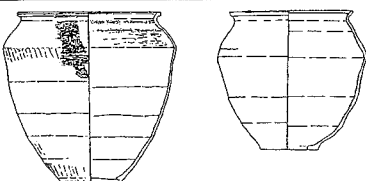
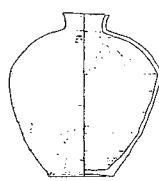

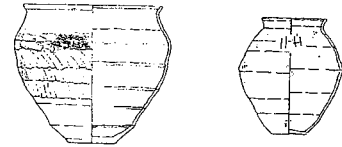
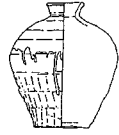


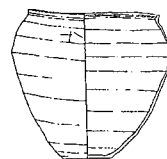
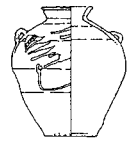
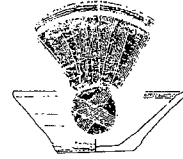
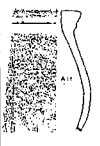
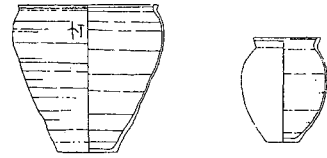
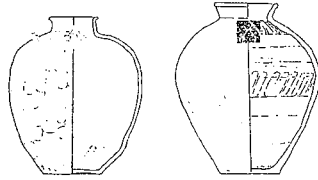
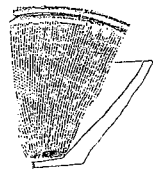
北部日本海側では14世紀半ばには北海道志海苔館の銭亀遺跡のように北海道にまで越前焼がみられるようになる。十三湊でも越前焼が出土している。この時期の越前焼と珠洲焼との比は1：4で、鉢類にいたってはそのほとんどが珠洲焼である。同じ湊町でも越前に近い普正寺遺跡の場合は、越前焼と珠洲焼がほぼ拮抗している。15世紀半ば以降、能登半島でも越前焼が流入するようになる。外浦に位置する道下元町遺跡では15%以上越前焼が占めるようになり、内浦にある西川島遺跡群でも15世紀後半には越前焼が搬入されているようである。普正寺遺跡では珠洲焼と越前焼の出土量が逆転し、甕類は珠洲焼が激減する。珠洲焼は15世紀中葉から甕・壺の生産を減少させ鉢類に特化していく。これに対して越前焼は生産地を平等谷に集中させるとともに窯を大型化し、甕・壺・鉢という基本三種は維持しながら、それぞれ形のバラエティーとサイズを増加させ、需要に応えていった。

16世紀になると北部日本海側では越前焼は珠洲焼に完全に取って代わる。生産におけるその象徴が岳の谷古窯跡群である。全長30m近い大窯を計画的に築造し、製品や燃料を1箇所集中して生産の効率を上げていったものと推定される。それはおそらく劔神社の指導のもと惣村規模で共同窯を運営し、その流通には敦賀あたりの新興回船業者が介在していたと想定される。こうした新しい結びつきこそ越前焼が15世紀後半以降その販路を急速に拡大し、16世紀には珠洲焼を駆逐して北東日本海側を一元的に制覇した原動力であったと推定されている。

西日本側の越前焼の流通状況については、若狭国では田島元山谷経塚群や山田中世墓群に見られるように13世紀後半以降越前焼の商圈に入っているらしいが、常滑焼や丹波焼、東播系の製品も流入してきている。14世紀には由良川河口出土と伝えられる「嘉元四年」（1306）の甕が著名で、この付近までは越前焼の商圈に含めることが出来るよう。

図1 越前焼 編年表

	甕の口縁部	甕	壺	鉢
12世紀後半～13世紀前半				
13世紀後半				
14世紀前半				
14世紀後半				

	甕の口縁部	甕	壺	鉢
15世紀前半				
15世紀後半				
16世紀前半				
16世紀後半				

(「越前名陶展」の編年表を基に一乗谷出土遺物に置き換え)

	14C	14C 後半～ 15C 前葉	合計
越前 甕・壺	215	359	574
鉢	2	1	3
合計	217	360	577
珠洲 甕・壺	447	257	704
鉢	302	345	647
合計	749	602	1351

第2表 越中国 梅原胡摩堂遺跡

	I	II	III	IV	V	VI	VII		合計
	12C 後半	13C 前半	13C 後半	14C	15C 前半	15C 後半	16C 前半		
越前 甕				2	1		9	7	19
壺				2			1	1	4
鉢								3	3
合計				4	1		10	11	26
珠洲 甕	21	10	22	42	41	10			146
壺	16	5	16	11	2				50
鉢	45	27	8	29	41	7			157
合計	82	42	46	82	84	17			353

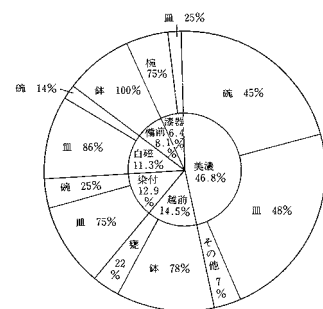
第3表 加賀国 普正寺遺跡

	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	V・Ⅵ	合計
	13C	14C	15C	
越前 甕・壺	1	11	12	24
鉢	2	3	7	12
合計	3	14	19	36
珠洲 甕・壺	1	8	1	10
鉢	2	4	13	19
合計	3	12	14	29
加賀	4	2	0	6

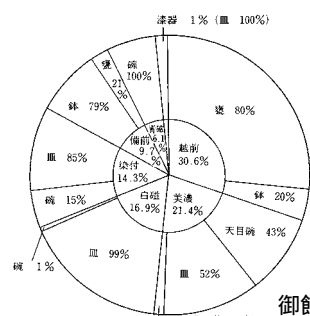
第4表 加賀国 白江梯川遺跡・三木だいもん遺跡

	三木だい もん遺跡	白江梯川 遺跡	合計
	12C ~ 13C	14C ~ 15C	
越前 甕	5	22	27
壺	1	6	7
鉢	13	49	62
合計	19	77	96
加賀 甕	72	23	95
壺	3	8	11
鉢	15	9	24
合計	90	40	130
珠洲 甕	36	14	50
壺	31	1	32
鉢	7	24	31
合計	74	39	113

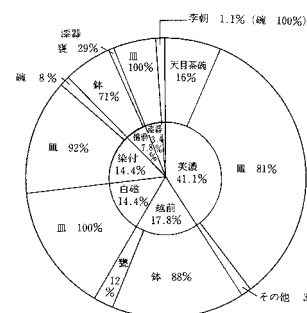
第5表 能登国 西川島遺跡群（16世紀）



白山橋遺跡



御館遺跡



大町・縄手遺跡